

■キゼンラック受け入れに際してのご挨拶

キゼンラックは1995年4月18日に渡辺牧場で生まれました。広い放牧地の真ん中で母馬が産気づき、仔馬の前肢と頭が、母馬の腸を突き破り肛門から出かかるといふ難産の末、生まれました。幸い母子共に命に別状は無く安堵したのを今も覚えています。

ラックは、中央競馬で4歳10月までに23戦2勝(平地1勝、障害1勝)して競走馬引退が決まりました。「引退後は、生産者で引き取らせてほしい」とお願いしてありました。ラックの場合、脚を痛めたわけではなかったので、乗馬として生きる道を探しました。そして馬運車を手配し、本州の乗馬クラブへと直行させました。

生産馬を乗馬クラブに送り出す時はいつも、「いつか不要の時は馬運車を用意しますので引き取らせて下さい」とお願いしていました。ラックはわずか4ヶ月足らずで「乗馬としては動きが重すぎる」という理由から「不要」とされました。

急いで馬運車を手配し、ラックは故郷に帰って来ました。しかし、このまま別の引き受け先がなければ、ここで2年ほど美味しいものを沢山食べさせ自由に過ごさせた後、恐怖と苦痛を感じさせない配慮をした上で麻酔薬を使って安楽死をするつもりでした。私のところでは、他の生産馬や引退繁殖牝馬をそのようにして来ました。全ての馬を寿命30歳くらいまで生かすのは不可能でした。

その後、ラックの悩みを打ち明けていた馬の保護団体「いななき会」の方が紹介して下さいたのが現在の「乗馬クラブアリサ」さんでした。アリサさんの中山先生は、ラックのそれまでのいきさつを知った上で、ラックを快く引き受けて下さいました。中山先生はいつも、ラックのことを「いい子だ、いい子だ、いい乗馬だよ」と褒めて下さり、18年もの長い間、ご夫婦でとても可愛がって下さいました。

ラックが23歳の6月、先々を考えられ、「長距離輸送に耐えられるうちに故郷に戻したい」とご連絡を下さり、ラックは再び帰郷することになりました。

それから4年近くが経ち、その間には、渡辺牧場の経営危機、労働力の不足などから、先行きが暗闇にしか見えず、もうラックも安楽死をしようか・・・と苦悩した時もありました。しかし、お陰様で多くの方々にご支援をいただき、渡辺牧場里親会の会費収入が増えたことから、会のサポートホースとしてラックを仲間に入れることができる運びとなりました。心から御礼申し上げますとともに、今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

渡辺牧場里親会
代表 渡辺はるみ